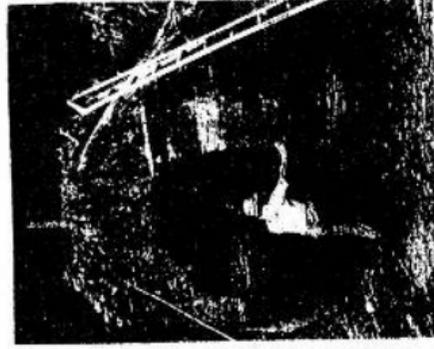


朝鮮人の不満が直接日本人にぶつかることのないようにとの配慮のようである。

B区の本土地域が開始されて間もなく、日吉台地区では上かぶり工を目標に、地下施設設置可能な所は何処か入るが未確定のまま全面的に地下壕の建設を続けた。地下壕は高さ三、四メートルの丘の麓から掘り始められた。当時、農家は丘の麓に家を建てて住んでいたが、無理矢理に家を麓から引き離された。地下壕は主にツルハシで掘り時々ハツバをかけ、掘り出した土砂はモッコやトロツコで外に運び、田圃や畑に捨てた。関係する土地は、海軍が「お国のため」といって、有無をいわず地主から買い上げた。昭和六年六月以降になると、セメントが足りなくなり、当時戦災にあつた田圃、酒屋、住宅街の石垣、塀などに使用してあつた大谷石を転用して、監政本部の地下壕、設置工事をした。地下壕掘削工事による犠牲者は、発表されているものでは、計六人とされている。この中に朝鮮人労働者が含まれているのかどうかは不明であるが、付近の民家の人の話では、夕方暗くなると地下壕の中から桶のような箱がトロツコに乗せられて出てくるのを、しばしば見かけたことがあつたという。保福寺の住職の話によると、戦後間もない時、海軍の人からあずかつた身元不明の二体の骨が、今も寺にあるそうである。また真山に戦時中にくつた身元不明者を埋めたといっているが、埋めた位置や人数は分からないとのことである。

●日吉で海軍は何をしていたか

○連合艦隊司令部・總隊司令部
司令部の将校達は、空襲のない時は、總隊が生用に建てた丘の上の寄宿舎で仕事をしていた。下士官・兵は、南側出入口付近の半地下のカマボコ兵舎で交代で寝泊まりしていた。地下のカマボコ兵舎で交代で寝泊まりしていた。空襲の時は、司令長官は地下の長官室で、幕僚は地下作戦室の奥のベットで休んでいた。空襲が激しくなつてくると、下士官・兵は通路の片側ベットを並べて休んだ。作戦会議は、空襲の時を除いて、寄宿舎内の作戦室で行なつていた。



連合艦隊司令部の地下壕入口の一つ